常葉大学造形学部
紀要　第19号・2021
蜂谷充志
HACHIYA Mitsushi
2020年11月13日 受理

View 2018 , Planning at the CAVE
―目の前にないものは記憶からなくなる―

View2018,Planning at the CAVE-
What is not in front of you will disappear from your memory

キーワード：
インスタレーション
ラムダプリント
アート
現代美術
表現

Material
ラムダプリント（1330 × 1010 4 枚）、広葉樹の灰、2011 年 3 月の新聞

概要 : モノと記憶の狭間の関係性を求めて、目の前にある消滅する現実に向けた視線を大切に考えた作品を制作した。全ての構成は、期間が終わると作品として消滅する。その作品をまとめた。

はじめに

1980 年代、新表現主義の波をかぶるところから表現活動が始まる。 物質にこだわるアートのもろさを痛感し、1996 年以降はフィールドイ ンスタレーションを中心に展開してゆく。「目の前にないものは記憶からなくなる」というテーマのもと、制度に束縛されない表現の場を確保し、社会空間に提示する一連のプロセスも作品の表現活動と考えている。

確実性の中には残部が存在し、その曖昧で取り残された残部を私はアートとして捉え、生活空間に関連付けた痕跡として、私は 30 年間作品を制作してきた。壁面には、野原にまかれた広葉樹の灰を撮影した 4 枚の写真。白と黒のみに色彩を抑えたラムダプリントである。床には 4000 × 3300mm の灰、広葉樹の灰は何度もふるいに掛けて、均一な粉状になっている。大木の記憶の残像を一面に撒きつめ、一枚のカーペット状になっている。中央には、2011 年 3 月 11 日の震災報道の新聞紙を星形に折ったもの。折られた新聞紙からは断片的に記事が読み取れる。そして天井から一つの電球が新聞紙を照らしている。それらがシンメトリーにレイアウトされている。整然とした空間には静けさが押し寄せ、自分の内面へと感覚をむかわせる。感知する感覚は、表に出にくい残部の力である。

2011 年のカタストロフィ（catastrophe）は、漠然と認識していた視点の先の問題を、私に突きつけた。それは、自然と 文化の関係性であり、現代社会という生活空間の中で呼吸する私の不安定な弱い存在が見えたことだ。物質と精神、生きるということと死ぬということ、その曖昧な部分さえ、残る余地を与えられなかったうえで、残った私の存在。そこで見たものが目の前から無くなる時、記憶からも無くなる。

NOTE

壁には、広葉樹の灰を草むらに撒いた写真の色彩を省き、モノクロに変換したもの。
床には、灰が撒いてあります。
中央の展示ケースの中には、震災直後の新聞記事を星型に折ったものを入れています。
2011 年 3 月に行った展覧会のインスタレーションに使用したものです。
それらを照らすように、光を吊るしました。
色彩を抑え、シンメトリーな構成とし、静かに自分との対峙を即すようなインスタレーションです。

構成の中心要素である広葉樹の灰は、樹木の原型がなくなっていますが、
樹齢何年もの時間の記憶と輪廻の象徴です。
それは､息を吹きかけ､指でこすれば簡単に飛んでいってしまうはかないものです。

「もの」と「こと」にあふれ、凄まじい勢いでそれらが繰り返されている今、
その中で、自分とは何かを見つめ直す行為を繰り返しています。
それは答えのない問いかもしれません。
むしろ、その行為ができる現状こそに何かの可能性のための可能性を感じ、
とても重要であるのではないかと感じています。
創り出す「物」に魅力や重要性を感じることもありますが､持続性の永遠があるかというと疑問が残ります。
物体は必ず朽ちます。
記憶の一つ一つが時間を構築し、私はその不確かに構築されたものの上にこそ、
核心があると確信しています。
多くの「こと」や「もの」は、目の前にないものは、記憶からなくなります。
しかし、すばらしい事象と出くわした時、
以前とその後では、自分の感性の変貌は心の記憶に残ります。

私はそんな場面を見たい、出会いたい、と思う感性を
大切にしたいと考えています。

この作品も時間が来れば目の前からなくなります。

私はその一瞬、静かで美しく…
2018.03